

こお水の中をすべつて來ます

「やあめだかさん今日は、今日は、春が來た春が來た、本當に春が來たのね」

ヒロシさんもすつかり嬉しくなりました。そこへ眞黒なツルクしたお體のおたまじやくしもチヨロリくく來ました。

〃春が來た 春が來た 何處に來た〃

山に來た 里に來た 野にも來た〃

お馬さんもヒロシさんもフミコさんも、嬉しくてくく大聲で歌ひました。だつてさうく春さんに逢へたのですもの、縁のおべとにめだかやおたまじやくしの模様のある川の帶をしめて赤や黄や紫の美しいお花飾りをつけて綺麗なお聲の春さんに……

もう春はここにでも來て居たのです。

三 等 ニコくダルマさん

佐藤 久子

人さぼりの、にぎやかな街にね、眞赤なお店が一軒ありました。

まつかなお店？

眞赤なお店つて一體なんでせう、眞赤なものを賣つてゐるお家なのよ、

まつかなもの？

それはね、ダルマさんなの、大きなダルマさん、小さなダルマさん、たくさん／＼のダルマさん、みんな赤い着物を着てお店の棚につらり／＼ならんでゐるでせう。

だから街を歩いて来るミダルマ屋さんのお店は、ミつても眞赤に見えるのよ。

そしてね、そのダルマ屋さんのお店にはやつぱりまつかなお顔をしたおぢさんがチョココンミお坐りしてお店ばんをしてゐらつしやるのよ、ぢや、おぢさんまでダルマさんミまちがへられないかしらつて？

うゝん、大丈夫!! 後の棚のダルマさん達は、どれもこれも、みんなお口をうんミむすんでお目はギロリ、にらめつこの恐い顔をしてゐるでせう、ミころがおぢさんは赤いお顔はしてても、何時もニコ／＼笑ひ顔で、ニコ／＼おぢさんつて云ふお名前がある位なんですもの、すぐ分るでせう。

ミころが或晩のミころ、そのニコ／＼おぢさんも、お家の人達もみんな寢てしまつて静かになるミ、お店では何時の間にかダルマさん達がみんな集まつて、ぐるりミ輪になり、何か御相談

をはじめたのよ、なんの御相談なんでせう。

それはね、「あのニコ〜おぢさんをひきつおこらせてみやう」つみ云ふ御相談なの、ダルマさん達は生れるさずぐ此のお店に連れて來られて、あの棚に飾られるけき、お店に來て誰もおぢさんの怒つたお顔をみたこごがないんですつて、

「ねえ、みんなさうしたらあのニコ〜おぢさん怒るだらうね」

「なんじかして、あのおぢさんが怒るやうなこごみんなで考へ様よ」

「ほんごにあのニコ〜おぢさんの怒つた顔つて一ぺんみたいなあ」

「ぢや、こごしたらさうだらう」

まめしぼりの鉢巻をしたダルマさんが、ゴロリ前に出て、みんなの顔をみまはしながら

「明日までにみんなが一人つゝ考へておいて誰が一番先にあのおぢさんを怒らせるか競争したら」

「それはおもしろい」

「それがいゝ〜」

いよ〜相談がきまるこ、みんなはめい〜自分の場所にかへつて一生懸命考へたのよ、こころが一番高い棚の上に色のさめた大きなダルマさんがゐるたの、そのダルマさんはこのお店の

看板みたいで、すみむかしからこのお店でいばつてゐるのよ、このダルマさんも一生懸命考へたけれど、さうしてもいゝ考へが出て来ないの

「困つたなあ、困つたなあ」

お店の柱時計がボン／＼／＼／＼

あ、四時だ!! お窓がうす明るくなつて来たわ

「弱つたなあ、弱つたなあ」

大きなダルマさんはまだ考へてゐるのよ、もうすぐあのニコ／＼おぢさんが起きて来るよ云ふのに、

「ニコ／＼いゝ考へが出来たぞ」

大きなダルマさん、さんないゝ考へが出来たのかしら、

「ようし、おぢさんが起きて来たら、今までの恐い顔をもつ／＼恐くしてあのおぢさんがびつくりして、ニコ／＼出来ないやうにしてやらう」

さう云ふと、今までだつてダルマのうちで一番恐い顔していばつてゐたのに、其の上お目目を一層ギロリと大きく光らせて、お鬚もぐつ／＼太くしお口をうん／＼むすんだお顔は誰がみてもびつくりするほど恐いわ

だん／＼明るくなつて、あちらこちらのお店の戸のあく音や牛乳屋さんの車の音、ラヂオ體操のピアノがにぎやかに聞えはじめました。

「おや／＼今朝はうちが一番遅くなつてしまつたよ」

ニコ／＼おぢさんがニコ／＼笑ひながらお店の戸をあけはじめると、お日様がお店のダルマさん達を一つのこらず、ぱあ／＼つゞみ明るく照しました。

さあ誰が一番先におぢさんを怒らせるでせうね

其の時賑やかな聲がして學校へ行く子供達がお店の前を通りかゝりました。

「おや君？」

君、ちよつとみてるらん、あそこの一番上の棚にまつても恐い顔したダルマさんがゐるぢやないか」

「どれ？あ、ほんまだ、随分こはい顔してるなあ」

「あんまり恐い顔してゝなんだかにくらしいねえ」

「あら／＼、ぢぢめてやほらうか」

「うん」

四五人の男の子が道ばたの石を拾つて、そつとお店に近づいて來たの、お店にはおぢさんも誰もゐません。

「いゝかい、一二三で投げるんだよ」

「ほら、一二三!!」

みんなの投げた石は大きなダルマさんのお腹さあのこはい顔に穴をあけてしまつて、おまけに、棚の上からゴロンところがり落ちたもんだから、下の棚のダルマさんにぶつかつて、ゴロンと、またその下のダルマさんもゴロンと、お店中ゴロンと、ダルマさんのころがりつこが、はじまつてしまつたのよ

「やあ、おもしろい〜」

「みんなころがり出したよ」

子供達は手をたゝいて面白がつてるの。

「おや〜〜〜これは大變なこゝになつた」

おぢさんはびびりして奥から出て來ましたがやつぱりニコ〜してゐるの、そして二つ二つ棚からおつこちたダルマさん達を拾ひ上げては手拭でよくふいて棚に上げてゐます。

「おや!このダルマさんは怪我をしてしまつたね、可哀さうに」

さう云つておぢさんは怪我をしたダルマさんは別に、みんな一つくならべてゐましたが、ふき氣がついてお店の前にある子供達の方をむいて

「坊ちゃん達や、道草をしてゐるを學校がおくれますよ」

つてやつぱりニコく顔でさう云ふ。一番前にゐた子供がもぢく出てゆきながら

「おぢさん、ごめんなさい。僕、僕達がいたつらしてダルマさんをおつこゝしたんです」

さう云つて丁寧に頭を下げます。後の子もみんな出て来て

「おぢさん僕もしたんです、ごめんなさい」

「僕も、ごめんなさい」

こ一緒におじをしたのよ、するにおぢさんはニコく顔を一層ニコくにして

「あゝ、いゝさもくそんなにおじぎをしなくつても、いゝんだよ、それより坊ちゃん方はほんごに正直でえらい、悪いことを知つてすぐあやまる、みんなは大きくなつてきつゝ偉い人になれるよ。」

おや、おしやべりをしてゐるを學校がおくれますね、早くいらつしやい」

「おぢさんほんごにごめんなさい、それぢや行つてきます」

「行つて來ます」

みんなは走つて行つてしまいました。おぢさんはみんなの後姿をいつまでもみつめながら

「あゝ、いゝ子だ〜」

つて、やつぱりニコ〜しるのよ、ダルマさん達はびつくりしてしまつて、おぢさんを怒らせることなんか、すつかり忘れてしまいました。

その晩またお店では、ゆうべの様にダルマさん達が集まつてゐました。おや〜頭やらお腹やらに繃帯をしてゐるダルマさんがたくさんゐますこと、あの大きなダルマさんも、やつぱりお顔とお腹に繃帯をして真中にゐます。

「私たちは本當に馬鹿だつたなあ、あんないゝおぢさんを怒らせる相談なんかして」

「ほんごに偉いおぢさんだ」

「こんなやさしい、いゝおぢさんはどこへ行つたつてゐやしないよ」

「僕達、ニコ〜おぢさんのお店に來られて、よかつたね」

其の時、真中の繃帯のダルマさんが

「こころでみなさん、私達は朝から晩まで、こんな、おこり顔して誰も笑つたものがない、今朝は私が何時もより、もつと恐い顔しておぢさんをおこらせ様もおもつたら、あの子供達が私をみつつけて、おこり顔がにくらしいミ石をぶつけたのですよ、だから怒り顔をしてゐるこみ

んなにくまれる。

ねえ明日からみんなニコニコおぢさんの様にニコニコ笑ひ顔のニコニコダルマにならうぢやありませんか」

次の朝からニコニコお店のダルマさんたちは、どれもみんなニコニコ顔のニコニコダルマさんになつてしまつたんですつて、

それぢやニコニコおぢさんもこんごはダルマさんごまちがへられるかもしれないわね。

をしまひ